

## 牧 師 所 感 :

## 老齢牧師の神への哀願

冒頭の「神へ嘆願」の哀願人は、千葉県八街市に開拓伝道を始めた老牧師 筆者である。老牧師である筆者は、過ぐる 2003 年、在日大韓基督教会を定年退職した 引退（名誉）牧師である。引退当時は 引退はしたもの まだ働く余力が残っていた。ところで 教派を越えて交わっていた 老牧師となった友人牧師達は 何人もおられたが、誰も再び 開拓伝道をしようとする動きが 見えなかつたのである。

さて、同僚の牧師達は、老後の生活が 十分保証されているだろうと解釈した。

ところが 筆者は 老後の心配がない訳ではないが、しかし 体はまだ丈夫で、数年間は働く場所さえあれば 働くつもりでいた。

ところが 職場を定年退職した者が、再び牧会に招聘されるということは 空の星を取る位 難しい。だとすれば 私はまだ働ける体力を持っている。然らば 都会での牧会は無理 いなかでも 田舎の 開拓伝道は可能ではないか？と心を決めて開拓伝道を始めた所が 千葉県の八街市である。八街市で教会堂を建立し、開拓伝道を始めて早や 23 年という月日が経つた。で、この辺で 今までの伝道と苦労話は省略する。

さて 今の筆者は老年牧師である。老年牧師と言っても八十歳後半までは、体に気を遣う程 体力に問題はなかった。老人性の故、少しの持病はあった。しかし 九十代に入って、自分も気付かないうちに体力の衰えを感じるようになった。

さて 筆者は 牧師である以上、現役の牧師としての務めを 果たさなければならぬ。  
にわか  
諸般の働きの中で 一番大事な務めは御言葉の宣布である。説教の途中 言葉を 俄 に忘れることがある。信徒はすぐ気が付く。だが 信徒は引退を密かに話し合うことがない。何故だろう。或る牧師が曰く「自分が建てた教会だから 文句を言わないでしよう。」と。確かにそう思う。しかし その寛大な言葉に甘んじてはいけない。故に 死を迎えるまでは講壇に立たなければならない。故に 一生懸命に神様にすがり、死ぬ時まで、牧師の務め ひたすら を 全う出来る為に 只 管祈る。主よ、日本人々を祝し給え！

神よ！栄光を受けませ。アーメン。